

ブレゲ指字電信機からトンツーへ

JJ1SXA/池

ブレゲ指字電信機は、フランスの精密機械製作会社ブレゲ社で製造された電信機で、送信者は初めに把手を回して受信側のベルを鳴らし、それを合図に受信者は文字盤の針を所定の位置に合わせ、次に送信者は文字の書かれた円盤の把手を動かして送りたい文字の位置に合わせる、すると断続した電流が送られ、受信機の針は同じ文字の位置まで回転する、送信速度は一分間に五、六文字程度であったし、また一人が文字を読み上げ、一人がそれを書き留める必要があったというものらしい。

日本の電信の始まりは、ペリーが2度目に来日した1854年、アメリカ大統領から幕府に贈られた「エンボッシング・モールス電信機」によるものだ、ちなみにエンボスとは凸凹のことで、トン・ツーの信号がコヒーラ検波器で検出、凸凹で印字されるのだ、この電信機は国の重要文化財に指定され、逓信総合博物館の所蔵となっている。

それより前の1846年から1851年にかけて、日本国内で電信の実験を行ったとされる記録がある、松代藩士であった佐久間象山は、自らオランダ語を習得し、「シヨメール百科全書」を基に電信機を製作し、松代藩鐘楼から70mの電線を通して、日本で初めての電信実験に成功したという記録がある、その時使用したのがブレゲ指字電信機のような、このように実験を行ったとされているが、佐久間が作成した絹巻銅線や電磁石などは現存するものの、肝心の電信機は見つかっていないので、佐久間の実験は成功したかどうかは、はっきりとはわかっていないとの説もある。

しかし、長野市松代町には、現在この時実験に使ったとされる「鐘楼」が残されており、「日本電信発祥の地」の石碑も建っています。

1854年のペリーによる実験から14年もの間、日本において電信の歴史にほとんど動きはなかったが、明治維新後、明治政府は電信の重要性を認識し、1869年にイギリスから通信技師を招いて、横浜燈台役所と横浜裁判所に日本で初めての電信回線を開通させ、「ブレゲ指字電信機」を採用した、その後、電信網の普及に伴い、モールス信号を使う電信機へ変わっていったのだが、日本の公衆電信事業開始にあたって導入された、その実状を伝える象徴的な電信機として、わが国の情報・通信発達史上に貴重であるとして、ブレゲ指字電信機も逓信総合博物館の所蔵となっています。

電信網の発達は、1871年には、世界の電信ネットワークにつながりました、1885年福沢諭吉は「電信あれば即日に世界の消息を聞くべし」という言葉を残している。

現在のインターネットとは比すべくも無いが、全世界の情報が、あっという間に日本で知ることができるようになったのは、ちょんまげに刀を挿していた時代から、まだ十数年しか経っていない時です。

有線電信の発達は、間もなく無線電信への発展を呼び、無線電信を使った日本海軍は、日露戦争の海戦で大勝利を収めることになったのだ、トンツー万歳！